

募集要項と募集広報から見た国立大学AO入試

白川友紀, 島田康行 (筑波大学アドミッションセンター)

国立大学が実施しているAO入試などの個性的な入試について、募集要項などと簡単なアンケートにより調査を行った。29大学の募集要項に記載された「出願資格」「募集人員」「入試日程」などの特徴の調査から、各大学がそれぞれ他大学とは異なる多様な入試を行っている事が示された。また、28大学からのアンケート回答では、「意欲」「プレゼンテーション能力」などの受験生の能力が向上した、期待より良かったとする結果が得られた。大学入試センター試験の利用/不利用については、今後も従来通りとする回答が多かった。

1 はじめに

学習指導要領(平成11年)に対応した高校教育の多様化は、普通科高校にも影響を及ぼしている(山村・荒牧 2005)が、大学のAO入試は年々拡大して多様化を進めている(福島 2006; 渡辺 2006)。

平成17年10月から18年3月にかけて、文部科学省の「先導的・大学改革推進委託」を受託し、「受験生の思考力、表現力等の判定やアドミッションポリシーを踏まえた入試の個性化に関する調査研究」を行った。この中で国立大学が実施しているAO入試など個性的な入試の現状の調査として、AO入試についてのパンフレット、募集要項などを送っていただき、特徴などを分類し、ねらいと実際に関する簡単なアンケート調査を行ったので報告する。

2 国立大学AO入試の多様性

国立大学でAO入試を実施している29大学の募集要項と募集広報から「入試体制」「出願資格」「募集人員」「入試日程」「選抜方法」「合格後のはたらきかけ」その他の項目について記載されている事柄を抜き出してまとめる作業を行った。その結果、各大学、組織が他とは様々な項目で異なる入試を行っていることを一覧にすることができた。

「出願資格」については、概ね制限を設けていない(一部の学部やAO入試の種類でのみ制

限のある大学やセンター試験の受験が必要な場合を含む)大学が19大学、一浪までなどの年齢等の条件、専門高校などのコース的な条件、TOEFLや実技の資格的な条件を設けている大学が10大学であった。「募集人員」については、特別なコースに進学できる(あるいは進学しなければならぬ)枠への受験としてAO入試を設けている場合から大括りの受験枠となっている場合まで多様であった。

「入試日程」については、出願から合格までの期間が最も短いのは21日間で、2番目は23日間であった。一方、最も長いのは169日間であった。出願前申し込み、いわゆるエントリー期間のある組織で最も長いのは159日間であった。エントリーの開始は早いところは6月20日から遅いところでも8月22日で、夏休み期間中にエントリーから志願への過程を始めている。合格発表が最も早く行われるのは7月13日であるがこれは8月入学の入試であり、次の9月1日も10月入学の入試である。4月入学で最も早い合格発表は9月15日であった。合格発表が遅いのはセンター試験を課すAO入試で、多くは2月9日~16日に合格発表が行われるが3月23日というところもあった。

「選抜方法」についても、一次審査は書類審査が多いが、出願前からも含めて、セミナー形式、プレゼンテーション、面接(集団、個別)など多様な審査が行われている。大学入試セン

ター試験を課すもの(42%)と課さないもの(58%)があり、課す場合にも資格試験的に用いるとして出願前から合格に必要な成績を明示しているものがある。

「合格後のはたらきかけ」を行っているとする大学がかなりある。内容は大学だけによらず教育組織によっても違いが見られる。

3 平成18年度国立大学AO入試の傾向

募集要項等による情報収集では分からないことについて、アンケート調査を行った。

「志願者数」, 「論理的思考力」, 「文章表現力」, 「口頭表現力」, 「プレゼンテーション能力」, 「コミュニケーション能力」, 「一般的な教養を身につけようとする意欲」, 「専門的な知識・技能を身につけようとする意欲」,

「貴学(貴組織)で学びたいという意欲」,

「自分で考え、判断する力」,

「問題を解決し、自分で道を切り開く力」,

「社会での行動力」,

「福祉活動やボランティアの経験」, 「語学力」,

「情報を適切に収集・整理し、活用する力」,

「教科の基礎学力」,

「教科の知識や考え方を活用する力」

の17項目について面接等の担当者に7段階で回答してもらった。

平成17年度以前からAO入試を実施している場合には、18年度の傾向を従来との比較で「大いに向上した」, 「向上した」, 「やや向上した」, 「変わらない」, 「やや低下した」, 「低下した」, 「大いに低下した」の7段階で回答してもらった。また、平成18年度に初めてAO入試を実施した組織には、18年度の傾向を、実施にあたって期待した程度と比較して「期待より大変良かった、大変多かった」, 「期待より良かった、多かった」, 「期待よりやや良かった、やや多かった」, 「期待通りであった」, 「期待よりやや良くなかった、やや少なかった」, 「期待より良くなかった、少なかった」, 「期待より大変良くなかった、大変少なかった」の7段階

で回答してもらった。

29大学にアンケートを送り、28大学から回答もらった(回収率(大学単位)96.6%)。組織数では163(学部・学科)から回答もらった。163の組織のうち7割強の122組織(74.8%)が平成17年度以前よりAO入試に取り組んでいた。一方、平成18年度に初めて実施する組織も41組織(25.2%)あった。

「教科の基礎学力」と「教科の知識や考え方を活用する力」については後で検討することとし、他の15項目への回答結果を表1に示す。

回収結果から、「志願者数」については、以前からAO入試を行っていた組織では増えているが、18年度に新しくAO入試を始めた組織では期待したよりも志願者が少なかったとする組織が多いという傾向であった。

以下、合格者(志願者)の評価(印象)に特徴のある項目について述べる。まず平成17年度以前からAO入試を実施している組織で、「向上した」とする組織が多い項目から述べる。

「向上」という回答と「低下」という回答の差に着目すると、「貴学(貴組織)で学びたいという意欲」(21.3%)、「プレゼンテーション能力」(18.0%)、「専門的な知識・技能を身につけようとする意欲」(15.6%)、「社会での行動力」(11.5%)、「問題を解決し、自分で道を切り開く力」(10.6%)、等の項目において「向上」の回答が多い結果となった。

「意欲」及び「プレゼンテーション」等の項目において特に「向上」しているという回答が多い結果となっているが、この背景としては、同時に記述してもらったコメントにも「志願者に提出させている自己推薦書などは高等学校で用意されているマニュアル通りに作成しているか、あるいは高等学校の先生の大幅な添削が行われているものと推察されます」「AO入試(面接)対策を行っているのか“そつのない返答をする”ものがみられ(る)」といった記述があることから、高等学校におけるAO入試受験指導が徹底してきているものと推測される。こうした「向上」が見られる一方で、「論理的

思考力」に関してはほぼ変わっておらず、回答数としては「低下」の割合がやや多かった。コメントにおいても、「事象を深く追求しようという意欲がやや低下している傾向がある学生が多いように思われる」という声あげられている。その背景としては、「一般入試では合格がやや難しい学力の高校生が多数AO入試を受験する傾向もみられます」「高等学校での学業成績が必ずしも高くない生徒や工業科・商業科な

ど専門学科の生徒も受験するようになり、実際に合格・入学するケースも見られるようになった」「いわゆるレベルの低い高校からの出願が目立つ」などのコメントから、これまで合格実績の無かった、あるいは少なかった高校からの出願・入学が増えたことが窺われる。受験生及び入学生の学力の内容や背景の多様化にともなって入学後の教育にいつその配慮が必要になってくるのではないかと思われる。

表1. 平成18年度AO入試の傾向

項目	平成17年度以前の AO入試と比較して		平成18年度初めて実施 して、期待していたより	
	向上したと 思う	低下したと 思う	多かった 良かった	少なかった 良くなかった
志願者数(%)	41.0	23.8	19.5	51.2
論理的思考力(%)	9.8	16.4	12.2	26.8
文章表現力(%)	14.8	13.1	14.6	29.3
口頭表現力(%)	23.0	13.9	31.7	17.1
プレゼンテーション能力(%)	27.0	9.0	34.1	7.3
コミュニケーション能力(%)	20.5	13.9	24.4	12.2
一般的な教養を身につけようとする意欲(%)	15.6	10.7	26.8	12.2
専門的な知識・技能を身につけようとする意欲(%)	24.6	9.0	48.8	4.9
貴学(貴組織)で学びたいという意欲(%)	26.2	4.9	56.1	4.9
自分で考え、判断する力(%)	18.9	14.8	14.6	22.0
問題を解決し、自分で道を切り開く力(%)	21.3	10.7	17.1	9.8
社会での行動力(%)	14.8	3.3	24.4	4.9
福祉活動やボランティアの経験(%)	13.9	4.1	19.5	17.1
語学力(%)	9.0	9.0	7.3	24.4
情報を適切に収集・整理し、活用する力(%)	13.9	13.9	12.2	9.8

つぎに国立大学におけるAO入試のうち、平成18年度に初めて実施した組織に関して、「期待より良かった」とする項目から述べる。

具体的には、「良かった」という回答と「良くなかった」という回答の差に着目すると、「貴学（貴組織）で学びたいという意欲」（51.2%）、「専門的な知識・技能を身につけようとする意欲」（43.9%）、「プレゼンテーション能力」（26.8%）、「社会での行動力」（19.5%）、「口頭表現力」（14.6%）、「一般的な教養を身につけようとする意欲」（14.6%）、「コミュニケーション能力」（12.2%）等、以前よりAO入試を実施している組織の回答と同様に「意欲」及び「プレゼンテーション」に関連する項目において特に「期待より良かった」と評価している回答が多い結果となっている。

高等学校におけるAO入試受験指導が徹底してきている背景のもと、「意欲（の表明）」及び「プレゼンテーション」に関しては、短期間でも受験生が向上・改善することができる分野であったと推測することができる。

一方で、「良くなかった」とされたのは、「語学力」（17.1%）、「文章表現力」（14.7%）、「論理的思考力」（14.6%）となっており、いずれも短期間で受験生が向上・改善することができない分野に係る項目であることが理解できる。

「教科の基礎学力」についてのアンケートでは、「数学」「物理」「化学」の3科目が10件以上あがってきた。平成17年度以前からAO入試を実施している組織と平成18年度に初めて実施した組織に関して以下にまとめて述べる。

「数学」は、向上4件、不変16件、低下3件、期待より良い1件、期待どおり3件、期待より良くない5件の32件であっ

た。「物理」は、向上3件、不変9件、低下3件、期待より良くない5件の20件であった。「化学」は、向上4件、不変9件、低下1件、期待どおり1件、期待より良くない2件の17件であった。これらの科目は「理学部」や「工学部」など、当該教科と関連が深いと考えられる組織（学部・学科）を中心としてあげられている。これは入学後の教育に必要な基礎学力があるかどうかを確かめる必要があるため、何らかの形で教科の学力を測っているところから名前があがっていると考えられる。

「教科の知識や考え方を活用する力」についても前述した「教科の基礎学力」と同様に、「数学」「物理」「化学」の3科目の名前が当該教科と関連が深いと考えられる組織（学部・学科）を中心に多くあげられている。回答内容は、「教科の基礎学力」とほぼ同じで、両者はあまり区別されていないと思われる。

回答の内容と組織の関係としては、高い数学の学力を求めているというアドミッションポリシーをあげている数学科では「期待より大変良かった」と回答している。一方、アドミッションポリシーが「工学分野において必要な基礎学力…」という表現の「環境」等の組織や、特に教科の学力をアドミッションポリシーにあげていなかった「情報」学科などで「期待より良くなかった」と回答している。サンプルが少ないためはっきりした事は言えないが、受験生は明確なアドミッションポリシーに素直に反応しているのではないかとと思われる。

4 AO入試の展開

これからのAO入試の展開を探るため、アンケートにより各大学のAO入試に全体的にかかわっている教職員の「大学入試センター試験の利用」についての見解を尋ねた。アンケートは、29大学に発送し、

27 大学から回答をもらった。回収率は大学単位では 93.1%となった。しかし、AO入試にセンター試験を利用している組織とそうでない組織がある大学から、それぞれについて回答をもらったため、全回収アンケート数は 35 となった。

センター試験利用の有無と今後についての回答を表 2 に示す。

AO入試による選抜におけるセンター試験は、現在利用している組織は概ね今後も利用を継続し、現在利用していない組織は 19 組織中 13 組織が今後も利用する意向がなく 6 組織は不明という結果であった。

現在（及び今後も）センター試験を利用する組織の意見は、基礎学力の確認・担保のために必要である、という点に集約する

ことができる。一方、現在（及び今後も）センター試験を利用しないという組織の意見は、次の三つに類型化することができる。

一つは、「(AO入試の) 実施時期がセンター試験よりも早いので、利用できないから」及び「センター試験利用の場合、合格者決定の時期が遅くなるため」というコメントに表明されている時期的な問題。二つ目は、「センター試験を導入することにより、センター試験に頼ってしまって面接・口述試験が甘くなることも危惧される」という選抜方法への悪影響の懸念。そして三つ目は、「AO入試の目的を達成するためにセンター試験を利用しない」という、そもそもAO入試の趣旨にセンター試験は合わないとする考え方である。

表 2. センター試験利用の有無と今後

センター試験の利用	利用	14	不利用	19
センター試験の利用	継続	13	継続	13
(不利用)の継続	不明	1	不明	6
募集時の合格点提示	提示	5	不提示	9
合格点提示(不提示)の継続	継続	4	継続	7
	変更	1	不明	2
			提示	4
			不提示	11

AO入試による選抜においてセンター試験を利用している 14 組織の中で、募集時に具体的な合格点を提示しているという回答は 5 件で、提示していないという回答は 9 件であった。募集時に具体的な合格点を提示していると回答した 5 件中、今後も募集時に具体的な合格点を提示する意向があるというところは 4 件、今後は提示する意向がないとするところが 1 件であった。募集時に合格点を提示していない 9 件中 7 件は今後も提示しないとしており、提示するとの回答は無かった。現在はセンター試験を利用していないが利用した場合

には合格点を提示する意向があるとの回答は 4 件、提示しないという回答は 11 件であった。

「提示する」という考えの 5 組織は、「入試の公正という観点と受験生に対する説明責任の観点から」というコメントに代表されるように、入試の手続き論として合格点を提示している模様である。

これに対して、「提示しない」という考えの組織は、「大学入試センター試験の成績は、あくまで一つの指標である。よって他の評価基準と比べて、特別な指標とはみなしたくない」という理念的な理由と、

「ハードルを設置すると、年ごとに限界点（例えば6割）に近い学力層が受験してくる傾向が見られ（る）」という現実的な理由の双方が、考えの背景に存在するものと推測される。

「(AO入試の)実施時期がセンター試験よりも早いので、利用できないから」という回答があったが、現行のセンター試験より易しい基礎的な内容の試験が実施された場合、また、現行センター試験の一部科目を高校2年次にも受験可能にした場合、それらの試験をいずれかの入試に導入することを検討するかどうかを尋ねた。

現行のセンター試験より易しい、より基礎的な内容の統一試験が実施された場合、4分の1強の組織が「いずれかの入試に導入することを検討する」と回答し、一方、4割弱の組織が導入を「検討しない」、また3分の1強の組織が「わからない」と回答した。導入を「検討しない」理由としては、内容、水準が易しすぎるものがあげられていた。

現行センター試験の一部科目を高校2年次にも受験可能にした場合、4分の1強の組織が「検討する」と回答し、一方、3割弱の組織が利用を「検討しない」、半数弱の組織が「わからない」と回答した。「検討しない」理由としては、高等教育への悪影響が懸念されていた。検討する場合の対象となる入試としてはAO入試がもっとも多かった。

5 おわりに

本調査から、2006年度にAO入試を実施した各大学はそれぞれ他大学と異なる独自の入試を行っており、その志願者は必ずしも大学側の期待に沿った者ではないという場合があることが示された。しかし、2007年度にはさらに多くの国立大学がAO入試の実施を発表しており、今後ますます

増えると思われる。

大学側と受験生側の期待に合った選抜が行われるには、受験生側から見たAO入試についての研究(大谷 2006; 嶋野・鈴木 2006)なども参考にアドミッションポリシーの策定や広報を行っていくことが大切であろう。

謝辞

本調査は、文部科学省「先導的・大学改革推進委託」による受託研究である。本研究では、パンフレットと募集要項の提供と、アンケートへの回答について、AO入試を実施している29の国立大学の入試課とアドミッションセンターの各位に、大変お世話になった。深く感謝の意を表す。

参考文献

- 福島真司, 2006, 「AO入試の評価について — 鳥取大学 AO入試に関する諸調査結果から —」『大学入試研究ジャーナル』16: 89-97.
- 大谷 奨, 2006, 「『合格体験記』にみる高校生の受験戦略とスタイル — AO/推薦選抜をどのように捉えているのか —」『大学入試研究ジャーナル』16: 107-112.
- 嶋野英彦・鈴木規夫, 2006, 「受験生から見たアドミッション・ポリシーと入学受け入れ方策」『大学入試研究ジャーナル』16: 143-8.
- 渡辺哲司, 2006, 「国立大 AO入試による入学者の特性」『大学教育学会誌』28(1): 110-6.
- 山村 滋・荒牧草平, 2005, 「新学習指導要領に普通科高校はどう対応したか — 『教育の基調の転換』と教育課程の編成方針 —」『大学入試研究ジャーナル』15: 35-41.